

オノ峠遺跡遺構合成図
（島根県教育委員会1993年を一部改変）



青木遺跡は出雲平野の北辺、北山山系の南裾に位置し、北山から南へ流れていた湯屋谷川により形成された小扇状地の縁辺部に営まれた、弥生時代中期から中世にかけての複合遺跡である。国道四三〇〇一年から発掘調査を実施しており、弥生時代及び古代の遺構・遺物について

- 1 所在地 島根県出雲市東林木町
- 2 調査期間 二〇〇三年度調査 二〇〇三年（平15）四月～二月
- 3 発掘機関 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 4 調査担当者 今岡一三・松尾充晶
- 5 遺跡の種類 官衙関連遺跡ほか
- 6 遺跡の年代 弥生時代～中世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

島根・青木遺跡

様々な新資料の発見が相次いでいる。なかでも弥生時代に関しては、出雲地方で出土例のない近畿式銅鐸の飾耳を伴う埋葬人骨や、四基以上の四隅突出型墳丘墓（最古型式を含む）などが発見された。

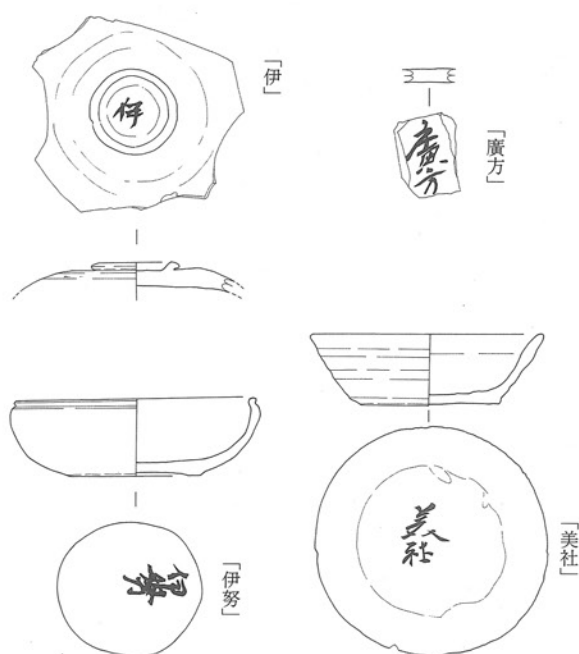
奈良時代後半から平安時代初頭まで（八世紀後半～九世紀前半）の遺構・遺物では、西側のⅠ区で基壇をもつ礎石建ちの建物二棟（瓦は確認されず）、湧水地点を木枠で囲い下流を石敷とする井戸や、果実を納めた土器の埋納遺構などが検出され、東側のⅣ区で神社施設の可能性のある建物（SB〇三）とそれを囲繞する貼石遺構、小型総柱建物（SB〇二・〇四）などが検出された。両調査区を隔てる現在の道路下には流路があったと推察される。

遺物は多数の須恵器のほか、文字資料として八〇〇点以上の墨書土器と、木簡約八〇点、神像、絵馬、斎串、刀形など信仰関係の特殊遺物も出土しており、注目される。墨書土器の出土数は、一遺跡からの出土数としては中国・四国地方で最多となる。墨書された文字のうち最も多いのは「伊」で、これは遺跡所在地周辺の郷名「伊努」を示したものと考えられる。なお、二〇〇二年度出土の木簡についてはその一部を既に報告している（本誌第三五号）。

木簡の多くは遺構面上層の包含層から出土したが、一部は、溝状遺構（SD一六・二八）や土坑状遺構（SX二〇・五〇）から出土した。このうちSX五〇は長軸二m短軸一mの楕円形を呈した浅い落ち込みで、多量の木材片と木簡のほか、木簡の削屑が数点出土している

ことが注目される。

木簡は、付札が多数を占めるが、このほかに田の売買に関わる文書を記した「売田券」木簡や、題籤軸、封緘に転用したもの、その未使用品などがあり、土地売買の記録を含む文書管理、物資の集積や労働力の徴発といった公的な機能を果たしていたことが強くうかがえる。



墨書土器

8 木簡の釈文・内容

木簡の釈文・内容							
I区SX一〇							
(1)	「久八人否 □若乙女」	218×9×6	051	(9)	「□□里戸主 □益 □□ □佐 □□ □出力」	(248)×(38)×7	081
(2)	「日置永床	(108)×20×3	019	(10)	中直」	(53)×(26)×4	081
I区SX五〇							
(3)	□御□		091	(11)	「美若和マ帶永」	185×21×3	051
(4)	□大		091	(12)	日置臣鷹	(79)×(21)×3	081
(5)	□ ^{〔養力〕}		091	(13)	「美鳥取マ宅次」	130×(18)×2	051
I区SD一六							
(6)	□宅三代」	(216)×26×3	059	(14)	「美若和マ万呂莖	(94)×20×3	019
I区SD二八							
(7)	□祖主二古」 ・ □主賜」	(125)×28×2	019	(15)	「美日置□	(65)×(18)×2	081
(16)	「伊肘マ小柿継」	159×20×4	051	(17)	「伊稻置マ自安万」	201×14×4	051
(18)	「伊鳥取マ淨×	(82)×24×3	019	(19)	「美舍人魚当	(111)×20×2	019
(20)	「取マ三上	(80)×20×1	081	(9)	「□□里戸主 □益 □□ □佐 □□ □出力」	(248)×(38)×7	081

(21)	子麻呂	(106)×17×3	059
(22)	「美吉備マ細女」	183×18×4	051
(23)	「生マ」	(65)×24×2	019
(24)	「伊海マ乙米」	(107)×21×4	019
(25)	「美御カ」 □□	(42)×(18)×2	081
(26)	六七八九十□十一十二十× □□	(159)×(25)×2	081
(27)	・□□□□□ ・□□□□□	(95)×(15)×2	081
(28)	□□	(191)×23×4	081
(29)	・□夫本家主家主冊冊廿今合天夫車二」 ・□□□□安□ 矣矣□□	(242)×(22)×3	081
(30)	・□□□□□ ・□□□□□	(137)×(16)×4	081
(31)	「□□□□	(123)×(21)×3	019

(32)	「四合」 「不」	径180×厚7	061
Ⅳ区遺物包含層			
(33)	・「売田券 船岡里戸吉備部忍手佐位宮税六束不堪進上」 ・「仍□□船越田一段進上 □□□倭マ □□□若カ」	352×42×4	011
(34)	・「上部上万呂□□当□□ ・「若倭マ月細足人 上税事」	(196)×28×3	019
(35)	「伊丈マ子宅万呂」	205×28×3	051
(36)	「伊吉備カ」 「□□□安岡」	188×22×2	051
(37)	「若□マ加津女」	240×23×4	051
(38)	「應カ」 「□令倭文 馬手」	217×26×4	051
(39)	「缶百」	200×30×5	051

(1)は〇五一型式の完形品。記載は人名であろうか。(3)～(5)は削屑。

賈四券船里戸吉備郡忍手佐位宮統六束不堪止上。

伊伊船越田取追上
ニ
一
ミ
ア
○

(33)

美書備細木

(22)

SX五〇からは現在約二〇点の削屑を確認している。断片ではあるが記載内容は後述の付札とは異なるようである。(7)は文書・記録の一部と考えられ、表裏で天地逆に記載される。「稲主巳年」の記載から年度を単位とした事物のやりとりが確認でき、木簡群・遺跡の性格を考えるうえで興味深い。

(8)～(32)は包含層出土資料である。大部分が基壇建物SB〇五と石敷き井戸の周辺のグリッドから出土した。(8)は年紀の記載のみ残り延暦十年十月六日か。年、月を略して記す例としては『公卿補任』

などがある。(9)は歴名風の木簡で、三段の文字記載がある。記載はいずれも短く名のみを表記であろうか。

(11)～(25)は、上下端が欠損し〇一九型式ないし〇八一型式に分類されているものもあるが、記載などから本来は〇五一型式の付札であったと推定される資料である。典型的な完形品としては(22)が挙げられる。記載様式は「美」か「伊」に続いて人名が記載される。下端を尖らせる形態から付札と推測されるが、物品数量を記した確実な例はない。また、記載が裏面に及ぶものも見られない。「伊」「美」は、

遺跡の所在する出雲郡伊努郷・美談郷、或いは伊努社・美談社などを意味する伊努・美談の略と考えられる。人名は吉備部・鳥取部・海部・日置・生部・稲置部・舎人など、天平一一年の『出雲国大税賑給歴名帳』の出雲郡に確認できる氏族である。また、②のように女性名も確認される。簡素な記載様式とあわせて、付札の記載が遺跡周辺でまとまることを窺わせる。

なお、⑩肘部は初見である。これら木簡の形態は、細部については上端を圭頭状にするもの(⑬⑭⑮)が存在するほか、大きさや下端の尖型加工の方法(⑬はケズリが不十分で荒い仕上げである)、裏面調整の有無などはそれぞれ数種に分類でき、製作技法は単一ではない。

⑲は習書木簡。⑳は曲物底板で、外面に「四合」と別筆で「不」が記載される。中心は穿孔され、弾み車などに転用されたか。

㉑以下にはⅣ区出土資料を挙げるが、墨書土器も含めて(出土墨書土器の点数でⅣ区はⅠ区の五分の一以下)文字資料の点数はⅠ区と比較すると少ない。

㉓は「売田券」の見出しを持つ木簡で、完形品。神社風建物とされるSB〇三にやや遅れて成立した小型総柱建物SB〇四の西南脇の遺構廃絶面から出土した。内容は「佐位宮税」を進上できなかった吉備部忍手が「松越田一段」を替わりに進上した記録。裏面には黒色の付着物があり墨書の判読を妨げているが、「進上」より下部

は割り書きで、少なくとも人名の記載がなされていることが確認できる。簡略な記載内容や公印を捺せない点、下端には表面の文字を避けて穿孔がなされていることなどから、紙の文書として現存する「売買墾田券」と全く同じ機能を果たしたのではなく紙の水田売買記録の要点を抽出した記録木簡と推定するが、文書行政の末端で紙の文書とは別に、文書機能も加味されて独立して機能した可能性もある。年紀は現状では確認できないが、戸主の表記から「松岡里」を里制・郷里制下の里名とみると、水田永代売の開始年代や、遺跡や他の木簡の年代観(八世紀後半―九世紀)と整合しない。

なお、八世紀前半の出雲国の郷名は『出雲国風土記』で全て確認できるが松岡里はない。また、「佐位宮」を院宮王臣家などの宮号とみるかⅣ区の神社風遺構も含めて在地の神社とみるのかも議論されている。このほか、「六束」が水田一段の売田価値としては安いこととから賃租に関わる木簡である可能性もあり、木簡記載内容と木簡製作年代の差や、木簡の機能も含めて本資料の検討課題は多い。

㉔は「税」に関わる文書木簡。㉕㉖は先述Ⅰ区出土の付札と同類の木簡である。

木簡の釈読にあたっては、国立歴史民俗博物館の平川南氏、東京大学の佐藤信氏、東京大学史料編纂所の加藤友康氏のご教示を得た。

(今岡一三・平石 充)